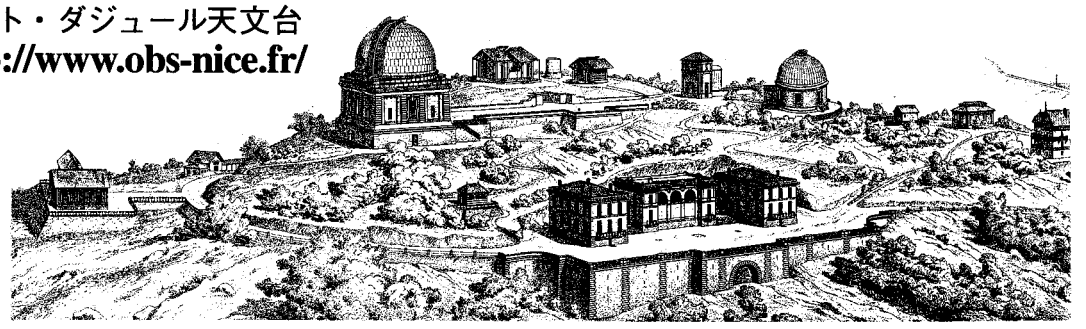
《海外研究室事情(11)》

Observatoire de la Côte d'Azur

コート・ダジュール天文台

http://www.obs-nice.fr/



ニース天文台の全景のイラスト．歴史を感じさせられる建物が小高い山の頂上付近に散在している．中央付近の大きなドームの中には，76 cm 屈折望遠鏡がある．このドームは，エッフェル塔で有名なエッフェルによって建設された．直径が 24 m のドームであるが，建設された当時は，ドーム自体が水の入ったリング状のタンクに浮いているような構造をしており，非常にスムーズに回転したという．

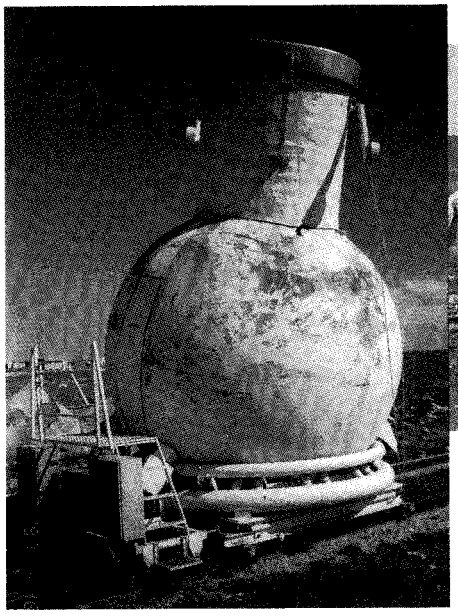
（コート・ダジュール天文台のパンフレットより）

コート・ダジュール（Côte d'Azur）といえば，世界有数のリゾート地として有名であるが，「コート・ダジュール天文台」というものはあまり知られていないかもしれない．それもそのはずで，コート・ダジュール天文台ができたのは 1988 年のことであり，まだ非常に新しい．ただし，新しいのは組織としての名前だけで，その歴史は 120 年くらい前まで遡る．

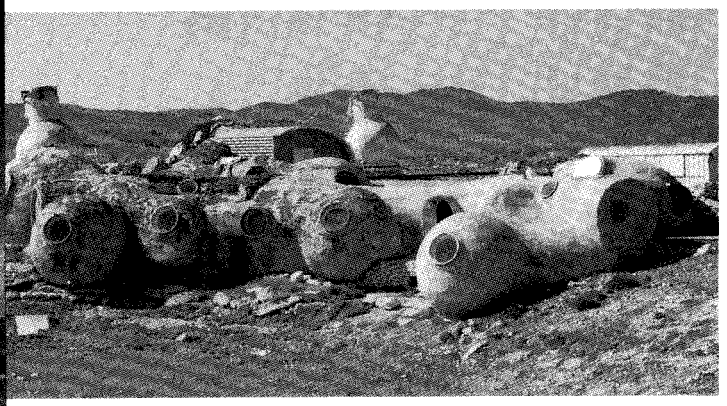
1879 年，アマチュア天文家でもあった銀行家の R.L.Bischoffsheim が，Bureau des Longitudes（日本語名は「フランス経度局」．最近改名して Institute de Méchanique Céleste となった．木下 宙氏より．）に何かフランスの科学に貢献するようなものを作りたいと申し出たのがそもそもの発端である．その後，南フランスのニースの近くの小高い山の上に天文台を建設することが決まり，「ニース天文台（Observatoire de Nice）」として，100 年あまりに及ぶ観測・研究活動が始まったのである．また，1974 年には，セルガ（CERGA）と呼ばれる研究機関がニースにほど近いグラース（Grasse）という町に作られた．ここでは，地球力学や天文学の研究がなされた．そして，そのグラース近郊のカレラン（Calern）高原には，様々な観測施設が建設されたのである．このニース天文台とセルガが 1988 年に合併して，コート・ダジュール天文台となった．フランス版の組織の統廃合というところであろう．つまり，一口にコート・ダジュール天文台といっても，その施設は，ニース，グラース，カレランの 3 カ所にあることになる．

このような経緯もあるので，コート・ダジュール天文台では，天文学および地球物理学の様々な分野の観測と理論の研究がなされている．天文学の分野では，位置天文学，天体力学，太陽系，太陽，恒星，銀河などの研究者が多い．観測施設としては，人工衛星や月のレーザー測距装置や，光干渉望遠鏡，シュミットカメラなどがある．特に，筆者の分野である天体力学に関しては，ヨーロッパにおける 1 つの拠点ともなっている．そのために，筆者は，1996 年 12 月から 1 年間，コート・ダジュール天文台（主にニース天文台）に滞在する機会を得た．

さて，ここでは研究の中身についてはさておいて，南フランスでの研究の様子を紹介しよう．まず日本と最も異なる点は，やはりフランスが個性の社会であるということであろう．それを象徴的



カレランにある光干渉望遠鏡．この望遠鏡が２台対を成して置いてあり，光干渉での観測を行う．



カレランにある光干渉望遠鏡の研究棟．これがれっきとした研究室の集合体である．遠方に２台のとっくり型望遠鏡が見える．

に示しているのが，カレランにある光干渉望遠鏡とその研究棟である．写真にも示すように，とっくり型という望遠鏡の形も面白いが，その研究棟があたかもSF映画の月面基地かのような形態をしていたことには驚かされた．これは，このプロジェクトのリーダーの趣味（？）だということだった．しかし，必ずしも使いやすいものではないと思うのだが．ちなみに，とっくり型の望遠鏡は，望遠鏡自体が野ざらしなのはさておいて，望遠鏡の駆動システムにギアを使っていない．このような発想は，どこからくるのであろうか．

また，生活を楽しみながら余裕を持って研究しているという点も日本と異なる（かもしれない）．まあ，傍目にはそう見えるだけなのかもしれないが，たとえば，朝出勤する前に海でひと泳ぎしてくるとか，昼休みにサイクリングに出かけるとか，ちょっと日本では不可能であろう．象徴的なのが，昼食．特にニース天文台には優秀なシェフが毎日腕によりをかけた料理を出してくれる．そのシェフは，食事中には必ず顔を出してきて，料理や他の話題について皆とあれこれ話をするのである．そのために，昼食にかかる時間は長い．食事に行くと１時間半はかかってしまう．その間，皆，料理を食べながら話し続けるわけである．単に話しているというよりは，議論をしているような感じだ．フランス人は議論好きだし，またそのためにも自分の考えというものをはっきりと持っている．

ただし，ニース天文台にいるすべての人がそうであるわけではない．中には，昼食をサンドイッチなどで簡単に済ませている人もいる．別に他人のやるようにやる必要はない．自分の好きなライフスタイルを頑固に持ちつづけているのである．

このように日本の研究機関とはかなり違った日常なわけであるが，別にどちらがすぐれているということでもない．ただ，日本に戻ってくると，常に何かに追われているような感じになってしまうのはどうしてだろう．少なくても精神的にはもう少し余裕を持った研究活動や生活がしたいものである．

吉川　真（宇宙科学研究所）